

私は、昭和十九年今の市役所近くで生まれました。家から西鉄甘木駅まで一キロ五百メートルはあると思います。

小学校上学年の頃、八つ上の次兄は、西鉄甘木線で久留米の高校に通学していました。兄の運動会を見に母と二人で西鉄電車に乗りました。初めて乗った電車は、左右一列にすわるところがあり真ん中はすごく広々していました。久留米に向かう途中、「本郷駅」と「北野駅」と「宮の陣駅」ではホームがあり、電車が擦れ違いますが、車掌さんの丸いわか合図が印象的でした。久留米が終点と思い込んでいたので、どうして次の「花畑」があるのだろうかと思議でした。「花畑」にはどんな花が咲いているのだろうか。いつか行ってみたいなと思いました。

私が中学生の頃は、父は、久留米に西鉄甘木線で勤めに行っていました。夕方急に雨が降った日には、私は、父の長靴と大きな傘を持ち、三十分弱かけて甘木駅まで迎えに行きました。父の帰ってくる電車は毎日決まった時間でした。キーというブレーキ音が聞こえるとホッとしました。父は、駅のすみっこで革靴を長靴に急いで置き替えました。革靴を大事にしているのだなと思いました。母が玄関の次の間で「お早ようございます。」と、言って父を迎えていました。夜なのに変な事を言うお母さんと思っていました。

大学生の時は、私は父と同じ電車に乗って通学しました。父は先に家を出るので私は毎日走って父を追いかけ、庄屋町の十字路でやっと追いつきます。父が座るのは、三両つなぎの二両目の南側の真ん中といつも決まっていました。私はその隣です。男子友達からは

「Kさんには話もかけられん。お父さんの横だから。」

と言われたものでした。一面青青とした水田から少し開いた窓に吹き込む風は、家から走ってきた私には大変気持ち良いものでした。早い帰りの日は、車窓から、真っ青な空に群青の耳納山のむこうに見える真っ白な積乱雲も大好きで見入ったものでした。夕方の帰りは、ゲエロ、ゲエロ、ゲエロとカエルの合唱を擦れ違いの待ち時間に聞き、ゴトゴトと鳴る振動に合わせて試験勉強をしたものでした。季節によっては、床にきちんと着いていない宙ぶらりんの短い足は、向かい合い座席のヒーターを暑かったり温かかったり感じたものでした。その日の気分です。

「もう久留米、もう来るめ」「もう北野、もう来たの、早や」「馬田、まあだ」と一人

で面白がっていました。家庭教師のアルバイトがあった日は、父が自転車で西鉄甘木駅まで迎えにきてくれました。夜の七日町から丸山公園通りは人家が少なく父の自転車のライトが右に左にゆらりゆらりと道を照らしました。甘木線での通学は私が寮にはいり終わりました。父はその後も七十才まで西鉄甘木線を使って元気に通勤しました。

私は退職し、年三回程の会合に行く際に西鉄甘木線を利用しています。ここ二年程は集まることができませんでしたが、コロナが終息したら会合に参加しようと思っています。友達と久留米までの四十五分間、おしゃべりしたり景色を眺めたりして楽しく行こうと思っています。

こんなに楽しい向かい合い座席の西鉄甘木線は、甘木までではなく風光明媚な雅の里の朝倉、杷木まで開通すると良いなと思います。

西鉄甘木駅開業百周年を聞き、記憶をたどってみると、亡き父母とのなつかしい思い出に出会うことができました。

これからも、西鉄甘木線での楽しい思い出を作っていけたらいいなと思います。